メッセージアウトライン
マタイの福音書6：19～24
「天に宝を蓄える」

［19-21］「自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。自分のために、天に宝を蓄えなさい。そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません。あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もあるのです」

前回は断食について教えられた。断食するときは、偽善者たちのようにやつれた顔をせず、髪に油を塗り、顔を洗うというごく普通の態度でいること、そうすれば隠れたところで見ておられる父なる神が報いてくださるということであった。私たちは寝食を忘れるほど祈りに打ち込むことがあるのかということも合わせて考えさせられた。

今日はそれに続く19~24節で「天に宝を蓄える」というイエスの教えについて学びたい。

ここで言われている宝とは単に金銭のことだけではない。ただの金銭の話ならばそれを蓄えることができない貧しい人々にはこの話には関係がなくなってしまう。人前でラッパを吹くようにこれ見よがしに施しをすること、人々によく見えるように会堂や大通りの角に立って祈る者はすでにこの世で自分の報いを受けているとイエスは教えられた。→6:1~5節　しかし、隠れた施し、隠れたところにおられる父なる神に祈ることはそれを見ておられる父なる神が報いてくださることも教えられた。そのような行いの報いは天に蓄えられるのである。

しかし、なぜ今自分が生きているこの地上で宝を、財産を蓄えてはいけないのか。それはあなたの宝のあるところにあなたの心もある。すなわち心を捕らわれるからである。

この地上の宝、財産は虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗む。そのようなものに心が捕らえられ、心を用いるのではなく、天に蓄えられた宝に心を用いる生活をすることが大切なのである。

イスラエルの当時の一般の家は粘土を積み重ねて作ったものであった。それゆえ、盗人は容易に家の壁を破って中に侵入し、財産を盗むことができた。また多くの穀物などの食料や貴金属などを蓄えることができたとしても虫やねずみなどが食い荒らし、さびで傷物になり全く価値がなくなってしまうこともあった。

ある人々は次のように言うかもしれない。「現代の私たちはそんな愚かなことはしない。お金は銀行に預け、債券を買い、有望株を買い、投資して運用していくならば決して目減りすることはない。かえって利益は積みあがっていくだろう。だから安心

だ。」
　しかし、虫やさびや盗人もまた現代的な形でやって来る。インフレや戦争、気候変動、大災害、食糧危機、世界規模の政治的、経済的混乱、株の大暴落、電話やネットを使った巧妙な特殊詐欺、さらには名前も顔も知らない者どうしがネットでつながって指示役の指示に従って家に侵入し強盗や殺人を犯す。これらは実際に私たちの周辺で起こっていることである。そして最後に死が壁どころか私たち自身に穴を開けて命を奪い、宝を永久に持ち去ってしまう。
それゆえ、イエスは「自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめ、虫やさびや盗人もいない天に宝を蓄えなさい」と言われるのである。しかし、全く自分のために金銭などを蓄えるなと言っているのではないことも覚えておく必要がある。それは後の箇所で説明する。
ではどのようにして天に宝を蓄えることができるのか。
イエスは言われる。→マタイ25:31~40
「人の子は、その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座に着きます。そして、すべての国の人々が御前に集められます。人の子は、羊飼いが羊をやぎからより分けるように彼らをより分け、羊を自分の右に、やぎを左に置きます。それから王は右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世界の基が据えられたときから、あなたがたのために備えられていた御国を受け継ぎなさい。あなたがたはわたしが空腹であったときに食べ物を与え、乾いていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、わたしが裸のときに服を着せ、病気をしたときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからです。』
すると、その正しい人たちは答えます。『主よ。いつ私たちはあなたが空腹なのを見て食べさせ、乾いているのを見て飲ませて差し上げたでしょうか。いつ、旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せて差し上げたでしょうか。いつ私たちは、あなたが病気をしたり牢におられたりするのを見て、お尋ねしたでしょうか。』すると、王は彼らに答えます。『まことに、あなたがたに言います。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。』」
　ここで言われている「わたしの兄弟たち」とは直接的には信仰を同じくするクリスチャンのことであるが、広い意味では私たちがこの世で出会い、関りのあるすべての人でもある。
　私たちが他の人を助けることは、主がご自分にしてくれていると受け取っておられるのである。

また使徒パウロも言う。→Ⅰテモテ6:17~19
「今の世で富んでいる人たちに命じなさい。高慢にならず、頼りにならない富にで

はなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置き、善を行い、立派な行いに富み、惜しみなく施し、喜んで分け与え、来るべき世において立派な土台となるものを自分自身のために蓄え、まことのいのちを得るように命じなさい」

私たちは人々に良い行いをすることによって自分でも気がつかないうちに、天に宝を蓄えるということをしているのである。

[22-23]「からだの明かりは目です。ですから、あなたの目がすこやかなら全身が明るくなりますが、目が悪ければ全身が暗くなります。ですから、もしあなたのうちにある光が闇なら、その闇はどれほどでしょうか」
イエスは当時の人々の目に関する考えを比喩的にとらえて霊的真理を示される。当時の人々は目が健やかで澄んでおればそこから光が入り、全身が明るくなる。しかし目が曇り、悪くなっていれば光が入らず、全身が暗くなると考えていた。しかしこれは科学的な裏付けによるものではない。イエスはすこやかな澄んだ目に象徴される健全な生き方をしている人は物事をありのままに少しのゆがみもなく正確に見ることができ、悪い目、すなわち偏見や先入観、嫉妬、ねたみ、自己中心などに色付けされた曇った眼、曇った心を持つものは全身が暗くなる、すなわち健全な生き方ができず、ますます闇の中に生きる者となるということを教えておられる。
これを先ほどの天に宝を蓄えるということから考えてみると、神を信じ従う信仰者として忠実に神のみこころに従い、自分の与えられている能力、賜物、力、金銭などを神の栄光のために、世のため、人のために用いていくならば、その人は健全な生き方の人、天に宝を蓄える人となり、ただこの世のことだけに執着する生き方をする人はやがてなくなっていく宝をこの世に蓄えるだけの人になってしまうのである。
[24]「だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることになります。あなたがたは神と富とに仕えることはできません」

しかし、誤解してはならないことは、神に従うためにはこの世の富、金銭を一切捨てよ、活用するなということではない。私たちに与えられているものを活用することは聖書が教えていることである。

マタイ25:14~30のタラントのたとえでは主人から預けられた一タラントを活用しなかったしもべを、主人が長い旅から帰って来てその報告を受けた時に「悪い怠け者のしもべだ」(26)と叱責している。(一タラントは六千デナリ、一デナリは当時の一日

分の労賃）
このしもべは主人に言った。→(24~25) 「ご主人様、あなた様は蒔かなかったところから刈り取り、散らさなかったところからかき集める、厳しい方だと分かっていました。それで私は怖くなり、出て行って、あなた様の一タラントを地の中に隠しておきました。ご覧ください、これがあなた様の物です」
主人はこのしもべの報告を聞いた時、「それなら、おまえは私の金を銀行に預けておくべきだった。そうすれば、私が帰って来たとき、私の物を利息とともに返してもらえたのに」(27)と叱責している。
このしもべは自分の怠惰を主人のせいにしているが、彼の主人に対する評価が間違っていることは他のしもべに対して豊かな報いが与えられていることからも分かる。
彼は働かない間、いったい何をしていたのであろうか。
それゆえ、私たちは富や金銭に心を捕えられてはならないが、神から与えられている、いや、お預かりしている私たちの富、金銭、能力、力、賜物などをその神から預かったものの管理人として活用することは大切な役割となる。どうせ天国には何も持って行けないのだからと怠惰で惰性的、投げ遣りな生き方をしてはならない。今、私たち信仰者はこの世で神に仕えつつ、天に宝を蓄える生き方をしていく者とならなければならない。